

## 真理に把われるな～真理に偏った実相論の欠陥～

2010年12月26日 於：神奈川集会

### 真理を一段下げたところに大きな意味がある

五井先生の教えと昌美先生の教えの違いがあることは事実です。しかしその違いは、ほんの少しのカラーの違いではなくて、非常に大きな違いである、そこに大きな意味があるんだと気づかなくてはなりません。それは、五井先生は真理を一段下げた「消えてゆく姿の教え」を説いており、昌美先生は「消えてゆく姿の教えのない真理」を教えているということです。

しかし、真理をそのまま説くことは別に難しいことではありません。真理を口先で説くことは誰にでもできることなのです。真理を実行できているかどうかが重要なのです。

真理をそのまま説いて、真理を実行させようと教えたのは生長の家であり、五井先生はその講師をしていて、真理をそのまま説くことの欠陥を知ったのです。そこで、五井先生は真理を一段下げて説くようになったのであって、そこには深い意味があるのです。一見すると、真理をそのまま説く昌美先生の教えの方が高く見えますが、実は真理を一段下げた五井先生の教え（消えてゆく姿の教え）の方が完璧な中庸であり、欠陥がないのです。

具体的に説明しますと、「人間は神の子である」という真理の教えを実相論と言います。しかし、この真理そのままを説く実相論には大きな欠陥があるのです。

一つは、神の子にはなれず、鼻持ちならぬ「偽善者」になる、という欠陥です。実際の言動は凡夫そのものなのに、「自分は神の子である」と神の子をよそおって自分を騙し、「あなたは神の子であるから病気は無い」と人を騙しているうちに、それがすっかり板について、偽善の癖に本心が覆われて、かえって神の子になれなくなってしまうのです。

二つ目は、これは正直な人に見られることですが、「私は神の子であると宣言しているのに、自分の行為は完全な神の子の行為をしてはいない、なんと駄目な人間なんだろう」、或はまた、「『あの人は神の子である』と表面では言っているのに、私の心の中では相手のことを嫌っている。ああ、自分はなんて駄目な人間なんだろう」と、平然と嘘をつくことに耐えられず、自分を責める人が出てくるのです。

もっとも、こう考える人は五井先生タイプで非常に少ないのですが、自己に正直な人ほど、このように自分を責め苛むようになるのです。そして、こう考えた人たちが、真理をそのまま行じることに疑問を感じて、五井先生の教えの原点に帰り、唯一会に入ってきているのです。ですから、唯一会の会員はすべて自分に正直な人ばかりで、腹を割って話せるわけですから、親しい法友をつくれるのです。お互いに真理という偽善の皮をかぶって

いては、本音を話せませんし、親しい友人を作れるはずもありません。

たとえば実相論の教えを信奉する人が病気になったとします。その人は日頃から「私は完全円満な神である」と宣言しているのですから、病気になったら言い訳ができません。完全円満な神がなぜ病気になるのですか？ 神が病気になるわけがないではありませんか。もし神が病気になることもあるのだとしたら、そんな神は不完全だということになります。不完全な神などいるわけがないのですから、「私は神である」と宣言していることと実際の行為とは違うことになります。このように真理に偏った「消えてゆく姿の教えのない」実相論では、現実に真理に反した出来事が生じた時には説明がつかなくなるのです。

そこで、実相論を説く宗教家は「心の法則論（想念法則論）」を持ち出してくるのですが、要するにこれは因縁因果論と同じことです。そして、「あなたが病気になった原因は皆あなたの想念に原因があるのです。あなたが自分は神ではないと思っているから、不完全な病気という現象が現れてくるのです。自分は神であると本当に思えば病気などは無いのです」と説くわけですが、ところが、病気は簡単には治らない。すると、その「因縁因果論」「心の法則論」がグサリを自分の胸を突き刺すようになるのです。それが他人に向けられれば人を責め裁く道具と化すのです。「心の法則論」の非常な欠陥である「自分を責め裁き、人を責め裁く」という地獄のような苦しみがそこから始まるわけです。

難しいでしょうか？ 分かりやすく、もう少し詳しく説明しましょう。

「実相論」と「心の法則論」は別の論理であって、この二つを用いると、矛盾に満ちた二元論になってしまいます。ある時は「あなたは神である」と説いて、聞いている人々を天国に連れて行ったかと思うと、次の瞬間には「あなたの運命が悪いのはあなたが悪いのだ」と心の法則を説いて、人を地獄へ突き落としてしまうのです。こんな矛盾した教えでは真の安心立命が得られるはずがありません。

五井先生は、生長の家の講師であった時にそうした体験をして、まず二元論の一つである「心の法則」を捨てて、「人間は神の子」という実相論だけの一元論にしたのです。次に、「私は神の子である」と真理を宣言するには時期尚早であり、無理であるからと、真理は真理として置いておいて、人間の神性を顕現する方法を、そうした「自力の真理宣言法」によらずに、「他力の守護の神霊による神性開発法」を採用したのです。それは、法然親鸞の時代からの他力念仏と同じ方法であったのです。その具体的な方法が「消えてゆく姿で世界平和の祈り」であるのです。

ですから、「世界平和の祈り」と「私は神の子である」と真理を宣言する方法とは、まるで根本の原理が異なっているのです。たとえば昌美先生の「人類即神也」とは、「人類は既に神である。世界は既に平和である」という意味なのです。それは真理ではあるのですが、現実には矛盾してしまいます。現実に矛盾した真理というのは、現実の役には立たず、かえって偽善という業想念をつけてしまって、神性が現れなくなるのです。「世界人類は平和である」というのは真理であるのですが、その真理を現すには、「世界人類は平

和である」という宣言法では不可能であることを知らねばならないのです。ここが難しいのです。

「世界人類は平和である」というのは真理であるのですが、その真理を現すには、「世界人類は平和である」という宣言法では不可能であることを知らねばなりません。「真理を今すぐ現したい」と願う気持ちは分かりますが、焦ってしまいますと、かえって真理が遠ざかってしまうのです。「早く神の子になりたい、早く幸せになりたい、早く世界を平和にしたい」、そう願う気持ちはよく分かります。しかし、そこで焦って、真理が既に実現したかのような嘘をついてはいけません。焦るという想念は業想念であるからです。

昌美先生は、ご自分の考えを一貫して通されれば、それはそれで理屈が合うのに、時々思い出したように五井先生の「消えてゆく姿で世界平和の祈り」も混ぜて説くものですから、「人間は神である。悪は無い」の立場に立っているのか、「人間は本来は神である。悪は消えてゆく姿」の立場に立っているのか、ご自分でも訳が分からなくなってしまうのです。こんな訳の分からないことを聞かされている講師の話していることも、訳が分からなくなるのは当然です。

「人類は神であるという真理を目覚めさせたい」という気持ちに異論はないのですが、問題はその方法なのです。「人類は神である」という真理宣言法がよいのか、それとも「世界平和の祈り」によって人類の神性を目覚めさせるのがよいのかと言えば、私は「世界平和の祈りによる神性の目覚めの方法」がよいと思います。なぜならば、「世界平和の祈り」による神性顕現法の方が無理がなく、正直に生きられて、自然で誰にでも易しくできる方法であるからです。

ここで、易しく結論をまとめると――

「世界平和の祈り」の原理と「人類即神也」の原理とは同じ原理ではなく、異なった原理であり、この二つの方法を同時に併用すると矛盾した二元論になってしまうのです。もっと簡単に言えば、この二つの方法には違和感があるということです。今は分からなくとも、行じているうちに、いつかそう感じる時がくるでしょう。そう感じる時がきたら、私の教えを思い出し、五井先生の本を読み直したらよいと思います。

## 真理の言葉と真理を現す行法は違う

五井先生の教えを、私は分かりやすく種々の角度で説くように努力しております。私の法話を熱心に読んで下さっている方々には、私の考えがよくお分かりのことと思いますが、初心者の方も多いため、何度でも分かりやすく説明することにいたします。

「世界平和の祈り」は本心から出た教えですが、普通の人には本心と業想念の区別がつかず、「私は神である」という真理の宣言行も本心から出た教えであると思違いしてしまう人が多いのです。なぜ本心から出た教えであると誤解してしまうのかと申しますと、「私は神である」という言葉そのものは真理の言葉であるため、本心から出た教えであると誤解してしまうからなのです。「真理の言葉であるのだから、その真理の言葉を行法として用いることがなぜ間違いなんだ？」と、こう思うわけです。

真理の言葉であっても、その真理の言葉を行法の言葉とすると、それは誤りなのです。そこを理解してもらうのがなかなか難しいのです。真理の言葉であるけれども、真理の言葉を唱えたからといって、その真理が実現化してくるわけではありません。しかし、真理の言葉を唱えていれば必ず真理の言葉通りに具現化してくると、その人々は信じているわけです。そういう人を「真理の言葉に把われた人」と言うのです。

真理の言葉を行法の言葉として唱えるだけで真理を実現化できるならば、「世界は平和である」と唱えればいいわけです。しかし、私がその方法をとらないのは、その方法では無理であると知っているからです。五井先生も「我は神の子なり」「我は神なり」という生長の家の教えは知っていたのですから、同じ手法で「世界は平和である」という宣言法を思いつかないはずがありません。しかし、その宣言方法では真理を現わすことはできないのだと知っていたからこそ、五井先生は自力を捨てて守護の神霊への他力行に集中し、悟ることができたのです。つまり、「真理の言葉を宣言し、どんなに繰り返し唱えても、真理を現すことはできないのだ」と、五井先生はまず悟ったわけです。

真理の言葉を宣言し、どんなに繰り返し唱えても、真理を現すことはできません。それが分からないと、いつまでも他力に転向できないのです。皆さんは、五井先生のように真理の言葉への把われから解脱できて、他力の「世界平和の祈り」の道に運良く乗り得た方々なのです。真理の言葉に把われている人々に劣等感を感じる必要はありません。

## 「願望成就法」は真実の宗教ではない

### 【念力は真の宗教ではない——宗教者は祈りと念力を区別しなければいけない】

昌美先生の説く「願望成就法」とは、特にアメリカで自己啓発（セルフヘルプ）として説かれていることを真似したものに過ぎません。すなわち、ノーマン・V・ピール、ナポレオン・ヒル、ベン・スウィートランド、ハロルド・シャーマン、ポール・J・マイヤーといった人たちが説いている成功哲学、成功心理学の思想を真似して取り入れただけで、昌美先生独自の新しい教えではないのです。この自己啓発の思想内容は念力による願望成就を教える思想であって、真実の宗教ではありません。この自己啓発の願望成就法を宗教と同等に説くことは神への冒瀆であり、信者を迷わすことになるのです。宗教の祈りによる無限供給と念力による願望成就法はまったく違うものであり、区別しなくてはならない

と五井先生も『白光への道』で詳しく書かれているので、それをぜひお読みいただきたいと思えます。

念力による願望成就法を教える宗教者は真実の宗教者とは言えません。皆さんはそんな甘い誘惑に引きずられて行ってはいけません。欲望を増長させますと、その欲望波動に合った幽界の生物が憑依してくる危険があるからです。「天命を完うするために必要な物は、願わなくとも神から与えられる」という教えが宗教の教えであって、願望を念じさせて、「『既に自分の願いは叶えられたのだ』と強くイメージしなさい」という念力の教えは宗教ではないのです。宗教はあくまでも我欲を捨て去ることにあります。といっても、欲望を直ぐに捨てることは難しいことですし、肉体生活を楽しんではいけないと言っているわけではありません。そこで五井先生は、「欲望を祈りの中に投げ入れて、欲望を純化しなさい」と説いているのです。

「なくてならぬものは神から与えられる」という教えが宗教の真理であるのですが、この真理も、なかなか信じられないというのが多くの一般民衆の本音のようです。「何も欲してはいけない」と説いても、欲望を無くすことは難しいことですし、「念力によって引き寄せた物質よりも、真実の祈りで神から与えられる報酬の方が遙かに大きい」と説いても、神を信じられない人々は念力に走ってしまいます。現世利益を無視した教えでは、多くの人々はついてはこないのです。かといって、一般大衆に媚びて、本心開発を後回しにして現世利益を大々的に宣伝すると低級な宗教団体となってしまいます。

現在の宗教は、本心開発を中心に教えながら、各人の本心開発が進むにつれて現世利益をも与えるようにしてゆかないと、人類すべてに教えを普及することはできません。本心開発も与えられ、天命を完うできるだけの現世利益も与えられるという教えが、五井先生の「世界平和の祈り」の教えであるのです。「これが欲しい、あれが欲しい、こうなりたい、ああなりたい、こうしたい、ああしたい」という欲望があってもよいから、そうした欲望や目標や計画をすべて「私たちの天命が完うされますように」という一つの祈り言の中に投げ入れてしまうのです。そう祈りますと、自分勝手な欲望が消え去ってゆき、自己の天命を完うするために必要な物質や立場や人間関係が自然に授けられるのです。欲しい物ひとつひとつを力んで強く念じる必要はないのですから、この祈りによる天授の方法は少しも疲れず、遙かに楽なのです。しかも、念力による物質の横取りよりも、遙かに莫大な利益を授けて下さるのです。

### 【なぜ「私の」ではなく「私達の」天命を祈るのか？】

「私達の天命が完うされますように」という祈りの「私達」とは、自分と家族や縁のある友人知人だけではなく、自分の祖先と祖先にまつわる霊人、自分に救いを求めてきている迷った靈魂などが含まれています。自分の運命は、他の霊人からの波動の影響により運命を大きく左右されることがあるのです。そうした自分に関係のある靈魂たちが浄まることによって靈魂は守護の力を持てるようになり、霊界側から今度は自分を助けて下さるた

めに、自己の運命が急速に上昇することになるのです。どんなに強い肉体人間よりも、霊界からの霊力で加護してもらった方が、自分の運命をずっと上昇させることができるのです。おもしろいのは、それでいて守護霊は、肉体人間からの感謝の祈りの有無によって加護力のパワーが強くなったり弱くなったりするのです。私たちにとって守護霊の力は必要不可欠でありながら、それが一方的ではなく、守護霊もまた私たちの祈りによって霊界での活躍が存分に発揮できるようになるのです。そういう理由があるので、「私の天命が完うされますように」ではなく、「私達の天命が完うされますように」と唱えた方がよろしいわけです。

### 【神人になる近道——「我即神也」と「世界平和の祈り」の違い】

「我即神也」については、「私は神である」という意味なのに、昌美先生始め白光真宏会の会員の多くは宗教上の一つの目標として設定しているようです。これは実におかしなことで、まじめに考えると頭が痛くなってしまいます。白光真宏会の会員の多くは、「私は神であると唱えていればいつかは神に成る」と信じているわけです。しかし、今の自分は神ではないのですから、「私は神である」と唱えることは嘘になるわけです。その点を指摘すると、「『本心（実相）の私は神である』と私は思っていますから嘘ではありません」と言う人がいます。それだったら、「本心の私は神である」と言うべきです。頭で分かっているからといって、「本心の」とか「本来は」という言葉を意味もなく省略してはいけません。「本心の」という言葉を省略したら嘘になり、嘘から真は生まれません。

またある人は、早く自分の神性を顕現しようと焦るあまり、「今、私は神である」「今、私は既に神に成った。今の自分は神そのものである」と、未来を先取りしてイメージしている人もいます。それでいて、「今はまだ私は神ではない」と無意識のうちに思っているのです。その証拠が「我即神也を目標としている」という言葉に表れています。目標としているということは、自分がまだその目標に到達していない状況を示しています。つまり、「我即神也を目標としている」という人は、「私は神であるという心境に私はまだ到達してはいない」と公表していることになります。

「『私は神である』と念じていれば、いつかは私も神に成れるだろう」と推測して、そのように念じているわけで、その方法で神に成れた人は、実は今まで一人も存在してはいないのです。昌美先生は、白光真宏会の会員の皆さんに「我即神也を宣言していれば、あなた方は神に成れます」と教えているけれども、昌美先生ご自身がその方法によって神に成れたわけではありません。「我即神也」の提唱者である昌美先生もまだ神人には成ってはいないのです。提唱者である昌美先生ご自身が神我一体に成った体験から「我即神也」を会員の皆さんに教えているのではなく、「我即神也と唱えていれば、多分いつかは神に成れるはずだ」という推測で教えているにすぎないわけです。

それに対して「世界平和の祈り」は、「神様、ありがとうございます」という祈りで神我一体になった五井先生が、私たちのために、自分と同じ苦勞をさせまいとして私たちに

授けて下さった祈り方で、「世界平和の祈りを祈り続けてゆけば誰もが必ず神人に成ることができ、自分ばかりでなく世界が平和に成るのです」と約束して下さった祈りです。その教えを信じて、私は「世界平和の祈り」を祈り続けました。その結果、まず私が五井先生に救われて、皆さんより一足お先に安心立命を得ることができたのです。そして、「世界平和の祈り」によって救われた事例の人間が、今ここで、この世に実在していて、「世界平和の祈りは最高の祈りなのです。世界平和の祈りを祈りましょう」と常に大きな声を出して伝えているのですから、皆さんから見れば、他の方法よりも「世界平和の祈り」の方がずっと信じやすいし、ずっと実行しやすいと思うのです。

実際に神人に成った人というのは、五井先生もそうでしたが、毎日百回も千回も「私は神である」とことさらに唱えることはしないものなのです。「私は神である」とことさらに唱えるということは、その人がまだ神に成っていない証拠を示しているのです。本当の金持ちは「私は無限の富を持っている」と唱えることはしないし、健康な人は「私は完全な健康体である」と数えるように唱えることはしません。それと同じように、真実に神人に成った人は、「私は神である」とことさらに唱えることはしないのです。言いかえれば、ことさらに言う人は、まだそうならない事実を発表していることになるのです。つまり、「私は神である」と毎日ことさらに唱えている人は、全員神に成っていない人であり、悟っていない人であるのです。真実の目からそういう人を見ますと、「『私は神である』とこうして毎日唱えておりますが、恥ずかしながら私はまだ神に成っておりません。今の私は神ではありません。今の私は神ではありません。今の私は神ではありません。…」と唱えているように聞こえてくるのです。

### 【世界平和の祈り唯一行——「世界平和の祈り」以外には何も必要なし！】

「世界人類が平和でありますように」と祈ることは、その行為が既に神の子の行為であるのですから、ことさら「私は神である」と自分や他人に言い聞かせる必要はありません。高慢にもならず、卑下することもなく、自分や他人に嘘をつく必要もなく、現実に対して正直にありのままを話せますし、「不完全な自分の行為はすべて消えてゆく姿」と思い、「消えてゆくと同時に完全な自分の本心本体が現れてくる」と思いますから、心が非常に明るくなるのです。現実の悪に矛盾せず、未来において悪の存在を否定し、未来の理想の善にも矛盾しない「消えてゆく姿」の教えは、現実と理想を一つにつなぐ重要な言葉です。

現実の悪の存在を一度認め、肯定して、しかも未来の世界における悪の存在を否定する、その現実と理想の両方のどちらにも矛盾しない言葉は、「消えてゆく姿」という言葉しかないのです。五井先生の提唱されているこの「消えてゆく姿」の教えが理解できれば、ことさら「私は神である」と唱える必要はないではありませんか。私たちの業想念はすべて消えてゆく姿であるのです。未来に進むにつれて、業想念は次第に小さく消えていって、ついには業想念は完全に消滅し、同時に私たちは神の子になるのです。

「私は神の子になる」と分かっているならば、焦ることはないではありませんか。「私は神の子になる」と本当に信じれば、なにも焦って「今、私は神である」と唱える必要はない

ではありませんか。それなのに「私は神である」と唱えるのは、「私は神の子に成る」という理想を信じていないからです。「私は神の子に成る」ということを疑うから、「私は神である」と唱えずにはいられないのです。「世界は平和に成る」という理想を信じないから、神の大愛と智慧を信じないから、自力であれこれやろうと力むのです。

「私は神の子に成るんだ。世界は平和に成るんだ」と信じて「世界平和の祈り」の行にひたすら励んでいれば、私たちの神性は自然に無理なく現れてくるのです。私たちの為すべきことは、ただ一つ「世界平和の祈り」だけでよいのです。他は何もいらぬのです。他の行法はすべて捨てて、「世界平和の祈り」一本に切り換えてしまうことです。「世界平和の祈り」は世界を救う唯一のものです。世界を救うのに必要なことは、「世界平和の祈り」一念だけです。その他の行法は何もいらぬのです。

### 質疑応答：「私は神である」と繰り返し唱えている人はまだ神ではない

#### 【はじめに：「実相は簡単には現せない」とまず知ることから始めましょう】

「我即神也」は、合気道の植芝盛平先生が説いた「我即宇宙」と、生長の家の谷口雅春教祖が神示として説いた「我は神なり」の両方の言葉を、昌美先生がミックスして作った言葉であるのです。この場合の即とは「同一」という意味であり、「私は神と同一である」という意味で使われているのです。いつも申しますように、「我は神なり」という真理に対して私は反対しているわけではありません。まことに真理は人間は神の子であり、神そのものであると言ってよいのです。それは真理であるのです。

しかし、その真理を頭で理解して、「我は神なり」とどんなに唱えても、現実に人間の神性を顕現することは不可能であると、その方法論の誤りを私は指摘しているのです。

「『私は神である』と宣言することは、自力でもなく他力でもなくて絶対力である」と生長の家では説いているのですが、絶対力の言葉であっても、まだ絶対力の心境になっていない人間が、守護の神霊に頼らずに、その言葉だけを唱えて「神に成ろう」とするわけですから、これは力んだ自力行となってしまうのです。

「私は神である」と何万回何億回唱えようと、その人は神に成ることはありません。それは、しばらくやってみれば、よほど鈍い人でも何生かかけてやってみれば、いつか分かってくることです。私たちが「こんなことをしても無駄だよ」と愛情をもって教えてあげても、わがままな子供と同じで、ある程度失敗して痛い目に遭わなくては自己の誤りに気づかないのです。ですから、間違っていることでも、本人の気がすむまでやらせてみて、「我即神也と宣言してみました、この方法では自己の神性を顕現できませんでした。五井先生の教えを教えてください」と泣きついてきたら、「ほら、私の教えた通りだろう。だから、世界平和の祈りが一番いいんだよ」と、その時に改めて教えてあげればよいのです。高慢な想いのあるうちは五井先生の教えが理解できません。高慢な想いを捨てて謙虚になった時、初めて五井先生の真実の教えがその人の心の奥底へと入ってゆくのです。



「『私は神である』と想っていれば、想念の法則によって自分が神に成ることができ、『人は神である』と想えば人を神に成らせることができ、『人類は神である』と想っていれば人類は神に成れる」というふうに、いかにも誰でもがやすやすと神に成れるように説く宗教者がおりますが、それがいかに難しいものであるかを五井先生は指摘しているのです。正直に自分の心を見つめてみれば、実相を簡単に現せると説く宗教者と、それは難しいと説く五井先生のどちらの言い分が正しいか、あなたにも自然に判ってくるはずです。

**【ご質問-1】** [あなたは悟っているのですか？]

森島さんは今現在の御自分をどう考えておられるのですか。悟ったものと考えているのか、それとも違うのか、どうなのでしょう？

**【お答え-1】** [本当に悟った人は、自分は悟ったとわざわざ繰り返し唱えたりはしない]

私は五井先生によってみ教えを完全に理解し、悟らせていただきました。私は五井先生のみ教えについてすべてが分かります。悟った時期は1990年頃です。昌美先生が「光明思想徹底行」など新しい行法を考え出した時期に当たります。

だからといって、「私は悟っている」とか「私は神である」という宣言行を7万回も繰り返すなどという馬鹿げたことは私はいたしません。本当に悟った人というのは、「私は悟っている」とか「私は神である」とか、そんな言葉を繰り返して唱えることはしないのです。既に悟っていたり、既に神我一体の境地になっていたら、今さら唱える必要はないではありませんか。

健康な人は、「私は健康である、私は健康である」と言わないでしょう？ 健康な人は、今さら「私は健康である」とは言わないものなのです。大金持ちは「私は大金持ちである。私は大金持ちである」とは言わないものです。なぜならば既に金持ちなのだから、わざわざ唱える必要がないわけです。それと同じように、既に悟った人というのは、今さら「私は神である、私は神である」と汗を流して唱える必要はないのです。言いかえると、「私は神である」と繰り返し唱えている人は、まだ「神に成っていない」ということを周囲の人に知らせているようなものなのです。

**【ご質問-2】** [現在の状態は真実が現れるプロセスだと思って印を組み、祈っていますが]

私は、今現在の自分の不完全な状態を真実の自分が現れるプロセスだと思い、世界平和の祈りを祈り、我即神也の印を組んでいます。現在の自分を神に至るまでのプロセス・消えて行く姿として祈り、印を組んでいます。その点において、「世界平和の祈り」「我即神也・人類即神也」は原理として同じだと考えています。あなたのご説明は単に言葉尻を捕らえて、これは違うと言っているようにしか思えません。この私の考えをどう思いますか？ 未熟者の悟っていない者のたわごとなのでしょう？

**【お答え-2】** [昌美先生の教えにはプロセスは無いのに、あるというのは矛盾している]

五井先生の教えには「消えてゆく姿」というプロセスの教えがあります。しかし、昌美先生の「我即神也」というのは、真理をそのまま宣言するのですから、「私は神である。悪や不幸や病気は無い、過去は無い」という意味であるのです。従って、昌美先生の教えにはプロセスは無いのです。ところが、昌美先生はご自分の思想に五井先生の思想「消えてゆく姿」を混ぜてプロセス、プロセスと説いているものですから、昌美先生の「我即神也」の教えにもプロセスがあるように多くの人が錯覚しているのです。これは昌美先生ご自身も分からずに使っている言葉なのですから、皆さんが分からないのも無理がありません。しかし、私には手にとるように昌美先生の心の動きが分かるのです。

「世界平和の祈り」には「消えてゆく姿」という教えがセットであります。でも、「我即神也」は「私は既に神である」と宣言してしまったのですから、「消えてゆく姿」があったら神ではないことが露呈してしまい、矛盾しておかしいでしょう？ だから、「私は完全な神である」のですから、「我即神也」にはもう「業想念は無い」のです。「我即神也」を宣言しておいて、「まだ業想念の消えてゆくプロセスがある」というのは矛盾しているではありませんか。

**【ご質問-3】** [人類の意識が目覚めに向けて大きく動き出しているように思うのですが]

いま世界中で、『神との対話』のように、「人間は実は神なんだよ」と述べる考えが各所より出てきていますが、このことについてどう思いますか？ 現象としては人類の状態は混迷を深める一方ですが、深層では人類の意識が目覚めに向けて大きく動き出しているように思いますが、どうでしょうか？

**【お答え-3】** [世界平和の祈りから個人の幸福と人類の平和が同時に実現される]

現象的には、まだまだ戦争や紛争、地震、天災、飢餓、病気などがありますが、こうした業想念はすべて消えてゆく姿であって、消えてゆくに従って、人類の本心（神性）は目覚めてゆき、世界は平和に成ります。現在は既に「世界平和の祈り」が大神様より人類に授けられたのですから、世界が平和になるのも時間の問題です。どんな現象が現れようと、「消えてゆく姿」と想って、「世界平和の祈り」をご一緒に祈り続けてゆきましょう。「世界平和の祈り」から、個人の真実の幸福と人類の平和が同時に実現されるのであります。